

---

## 転移焦点化精神療法による 病的自己愛の治療

ダイアナ・ダイヤモンド,  
フランク・E・ヨーマンズ,  
バリー・L・スターン,  
オットー・F・カンバーグ著  
鳥越淳一訳

金剛出版, A5判 530頁, 7,480円, 2025年11月刊

(福岡大学医学部精神医学教室／日本精神分析協会会員)

原田康平

---

本書は、前著『境界性パーソナリティ障害のための転移焦点化精神療法』に続く、病的自己愛および自己愛性パーソナリティ障害に特化した転移焦点化精神療法（TFP-N）の治療マニュアルである。筆頭著者のダイアナ・ダイヤモンド氏は、TFPの第一人者であるオットー・カンバーグ氏らに指導を受けながら、25年以上にわたりワイル・コーネル医科大学パーソナリティ障害研究所において自己愛患者の臨床と研究に携わり、その集大成として本書をまとめている。

訳者の鳥越淳一氏は、コロンビア大学精神分析訓練研究センターおよびTFP-New Yorkにて転移焦点化精神療法の訓練を受けTFPセラピストとして治療と研究に取り組んでおられ、その経験を活かして大著の翻訳作業を成し遂げられた。SNS文化とともに「承認欲求」という言葉が一般化している現代においては、人々の自己愛が肥大化しやすい環境にあり、病的自己愛について精神的に深く考察する本書の価値は大きい。

自己愛を論じるにあたり、本書は、北米および英国の対象関係論や自我心理学を中心とした精神分析理論に加え、愛着研究やメンタライゼーション理論を取り入れており、カンバーグ理論の影響の大きさがうかがえる。同時に、神経生物学や社会心理学などの実証研究の知見も積極的に参照しており、そのことが幅広い読者層に対して高い説得力をもって訴えかけることを可能にしている。

現実的な自己評価に基づく正常な自己愛に対し、病的自己愛は、理想化された自己と価値下げされた

自己や他者から構成され、不安定な性質をもつ。十分な期間にわたり、安全な依存を可能にし、子どもの現実的能力の発達を支える愛情深い親像が安定して存在しなかった場合、重要な他者からの賞賛によって得られる安心感が補償体験として機能し、病理的な誇大自己の中核を形成するとされる。

カーンバーグの病態水準論に基づき、本書では病的自己愛を、高次水準、境界性水準、悪性自己愛の三段階に整理し、重篤度の増加に伴い、対象関係の質や親密さを形成する能力、道德機能が低下し、攻撃性と羨望が増大すると説明する。さらに、症状の現れ方として、厚皮（誇大型）と薄皮（脆弱型）の区別が示されるが、著者らはこれを単純な二分法とは捉えず、誇大性と脆弱性は多くの場合に混在し、治療過程において力動的に揺れ動くものと理解している。

転移焦点化療法という名称が示すとおり、本書の治療論の特徴は、自己表象と他者表象が一組となった「ダイアド」という概念を鍵に、対象関係を捉える点にある。〈価値下げされたセラピストとの関係における理想化された誇大自己〉や〈価値下げされ不適応な患者との関係における優れたセラピスト〉といった具体的なダイアドが豊富な症例とともに示され、理論がどのように治療介入へと結びつくのかが明快に描き出されている。病的自己愛という対応に苦慮する臨床対象に対し、理論と実践の両面から確かな指針を与える一冊である。

原書：Diana Diamond, Frank E. Yeomans, Barry L. Stern, Otto F. Kernberg : Treating Pathological Narcissism with Transference-Focused Psychotherapy